



一般財団法人
国際協力推進協会 会報

No.020

July 2025

CONTENTS

01 ごあいさつ

カリブ事業

カリブ諸国・リーダー招待計画

03 **ジャマイカ外務・貿易省二国間関係局長招待計画**

留学生支援事業

06 第6期ザビエル留学生在上智大学を卒業
 次期留学生在が決定
 「ザビエル高校留学生奨学金制度」へのご寄付のお願い

07 APICの留学生たちが丹波篠山にて国内研修

INTERVIEW

09 **第8期ザビエル留学生 ユリ・ホセイさん**

11 **「バルバドス 歴史の散歩道」(その6)**

第4部 海賊たちの系譜(続き)
 寄稿: 品田光彦 元駐バルバドス日本国大使

講演会事業

15 APIC 早朝国際情勢講演会

16 令和7年度(2025年度)事業計画書

18 APIC 役員名簿

去る3月末、一人のAPIC。上智大ザビエル高校奨学生が4年間の上智大での勉学を終え、卒業、パラオに帰国しました。国際経済・経営を学んだウバイは、姓をキンジョーと言い、家系のルーツは沖縄にあると言っていました。大学ではバスケットボール部に属し活躍しました。彼の卒業は大変嬉しいことです。ささやかな送別ランチで、今後の多幸を祈念しました。この機会に、この奨学金事業に対し資金を含めご支援を頂きました関係者、団体の皆様に深く御礼を申し上げます。また9月には、我々の別のプロジェクトにより上智大大学院で環境学を勉強してきた中米カリブのバルバドスの留学生在が卒業する予定です。何時も活発に議論に貢献するニキータの姿には、皆が元気づけられます。

教育は、国の力の重要な部分を成します。日本の大学にも多くの留学生在が来るようになっていきます。高水準の、開かれた、世界的な教育は、広い意味での文化力、ソフトパワーであり、世界への貢献でもあります。今、米のトランプ政権はハーバード大などに対して留学生政策等を変更するよう圧力をかけています。「いじめ」ともいえるかかると、介入は、思想や科学の自由を損なうことになり得ます。大学はこれに立ち向かっています。ハーバードは、世界屈指の大学であり、広く世界の「ベスト・アンド・ブライテスト」の学生が集まっています。現地で見たその知的生産力には圧倒されました。ハンチントンやナイといった世界的に著名な学者が自分で持ってきたサンドウィッチやリンゴに齧り付きながら、学生と真剣

な議論をしているフ라운・バツグ・ランチは今でも忘れられません。大学への「いじめ」が続くと、結局、米の力を弱め、イノベーションの力も削ぐことになるのではないかと心配になります。影響を受ける学生達の不安は、想像に余りあります。大事にならぬよう、願わざるを得ません。
 (6/23記)



重家 俊範
 理事長
 一般財団法人国際協力推進協会(APIC)

2025年7月

APICの主な動き [2025年1月~6月]

- | | | | |
|----|--|----|--|
| 1月 | 第413回早朝国際情勢講演会 (講師: 外務省総合外交政策局長 河邊 賢裕氏) | 4月 | ジャマイカ外務・貿易省二国間関係局長招待計画 |
| 2月 | 第414回早朝国際情勢講演会 (講師: 前駐ミャンマー特命全権大使 丸山 市郎氏) | | 第416回早朝国際情勢講演会 (講師: 前駐英国特命全権大使 林 肇氏) |
| 3月 | 第415回早朝国際情勢講演会 (講師: 前駐ウクライナ特命全権大使 松田 邦紀氏) | 5月 | 第417回早朝国際情勢講演会 (講師: 前駐エジプト特命全権大使 岡 浩氏) |
| | APICの留学生たちが丹波篠山にて国内研修 | 6月 | 第418回早朝国際情勢講演会 (講師: 外務省中南米局審議官 高橋 美佐子氏) |
| | 第6期ザビエル留学生在のウバイさんが上智大学を卒業 | | |

今号の表紙写真



マーシャル諸島共和国 ジャルト環礁
 撮影者: フロイド・K・タケウチ
 Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

ジャマイカ外務・貿易省二国間関係局長招待計画

APICは2025年4月2日から9日まで、ジャマイカ外務・貿易省のニコレット・ウイリアムズ二国間関係局長を訪日招待しました。

APICによるオリエンテーションと歓迎夕食会

4月3日午前、APICは、ウイリアムズ局長にオリエンテーションを行いました。重家俊範理事長からは、歓迎の後、日本の政治・経済・社会情勢について説明しました。その後、荒木恵事務局長から日程等について説明を行いました。仙台の視察には田中一成常務理事が、都内のミーティングには荒木事務局長が同行しました。

また、4月8日夕刻、APICは、重家理事長主催の歓迎夕食会を開催しました。同夕食会には、リチャーズ駐日ジャマイカ大使を始め、上智大学大学院地球環境学研究所の教授や元駐ジャマイカおよびバルバドス大使、外務省中南米局を含め、18名が出席し、和やかな雰囲気の下、ウイリアムズ局長の訪日を歓迎しました。



APIC事務所にて。左から、APIC 田中常務理事、ウイリアムズ局長、APIC 重家理事長、荒木事務局長



ジャマイカ
Jamaica

中米カリブ海地域に位置する立憲君主制国家。1962年にイギリス連邦加盟国として独立。
面積：約10,990km²（岐阜県とほぼ同じ大きさ）（世銀）
人口：282.7万人（2022年、世銀）
首都：キングストン
民族：アフリカ系が9割
言語：英語（公用語）、ジャマイカ・クレオール語（いわゆる「パトワ語」を含む）
宗教：キリスト教

（基礎データ出展：外務省 HP）

長の訪日を歓迎しました。

JICA訪問

4月3日の午前、ウイリアムズ局長はJICAの伊藤圭介中南米部長に面会しました。2024年7月の巨大ハリケーン被害の直後に、JICAの田中明彦理事長がジャマイカを訪問されたこと、また、日本政府から無償資金



左：JICAにて／右：重家理事長主催の歓迎夕食会にて、リチャーズ駐日ジャマイカ大使による挨拶

協力が行われたことに対して、ウイリアムズ局長から謝意が述べられ、伊藤部長からは現在ジャマイカに対して災害対策分野での円借款を検討中である旨の説明がありました。

外務省中南米局長主催の屋食会と駐日ジャマイカ大使館訪問と歌舞伎観劇

午後は、外務省野口泰局長主催昼食会の後、駐日ジャマイカ大使館を訪問し、夕方から歌舞伎座で歌舞伎を楽しみました。

東京消防庁本所防災館で防災体験

4月4日の午前は、本所防災館を訪

| 滞在中の主なスケジュール | |
|--------------|---|
| 4/2 (水) | - 来日 - リチャーズ駐日ジャマイカ大使主催夕食会 |
| 4/3 (木) | - APIC 事務所にてブリーフィング - JICA 訪問 - 野口泰 外務省中南米局長主催昼食会 - 駐日ジャマイカ大使館 表敬訪問 - 歌舞伎鑑賞 |
| 4/4 (金) | - 東京消防庁 本所防災館 訪問 - 気象庁 訪問 - 上智大学 訪問 |
| 4/5 (土) | - 京都へ移動 - 京都市内観光 |
| 4/6 (日) | - 京都市内観光 - 東京へ移動 |
| 4/7 (月) | - 仙台へ移動 - 石巻市 震災遺構大川小学校 訪問 - シーパルピア女川 訪問 - 東松島市 震災復興伝承館 訪問 - 東京へ移動 |
| 4/8 (火) | - 重家 APIC 理事長主催夕食会 |
| 4/9 (水) | - 離日 |

問し、種々の防災体験に参加しました。防災館では、地震の揺れの体験、初期消火や応急救護（AEDの使い方）、火災の煙からの避難要領など、防災に関する知識や技術を学ぶ体験をしました。ジャマイカは、ハリケーンや地震があり、日本と共通した自然災害があるので、局長も非常に興味を持って参加しました。シアターでは、関東大震災を体験した松本ノブさんが残した記録をもとに作成された動画が上映されましたが、関東大震災を追体験することで、日ごろの防災意識を高め、命を守る防災行動、共助の大切さを学びました。突然襲ってくる大災害に対して命を守るためにどう行動すればよい

か、現代にも通じるヒントが隠されています。

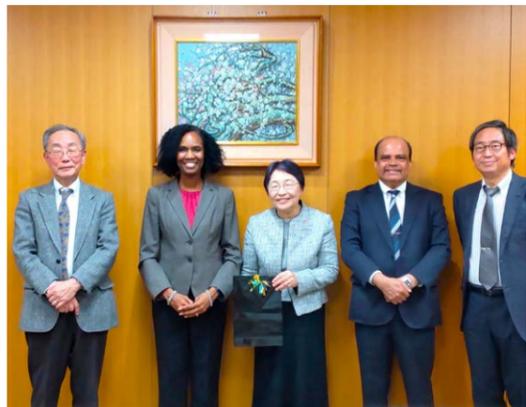
気象庁

4月4日の午後の気象庁では、最初に、2階の見学施設で、津波が起こるメカニズムや、地震、火山噴火などの説明を受けました。その後、気象予報・台風・津波観測を行っているフロアで、モニターが多数配置されている部屋の中を、ガラス張りの廊下から見ながら、予報士からそれぞれの予報士が行っている仕事の内容、特に津波情報の発表や総理への連絡のタイミング、24時間体制で観測していることなど、緊張感の伝わる仕事の説明を受けました。

その後、地震と火山活動の観測を行っている班の仕事について、担当官から説明を受けました。30年前の神戸の大震災後に導入されたモニタリングシステムなどの説明を受けましたが、ジャマイカにはない近代的な設備に局長は驚いていました。

上智大学

上智大学では、地球環境学研究所（大学院）のプテンカラム教授と黄教授に面会しました。途中から、杉村美紀学長も加わり、2015年の安倍総理（当時）のジャマイカ訪問の際に早下隆士学長（当時）が同行し、同総理及びジャマイカ首相の立会いの下で上智大学が西インド諸島大学（UWI）^{※1}とMOU^{※2}を締結していること、また、その後、UWIケイプヒル校と留学生の受け入れに関するMOUを締結し、



上智大学にて

※1 The University of the West Indies (UWI)：西インド諸島の17の国と地域で英語による高等教育を行う大学。ジャマイカのモナ校、トリニダード・トバゴのセント・オーガスティン校、バルバドスのケイプヒル校、アンティグア・バーブーダのファイブアイランズ校の4つのキャンパスの他、グローバルキャンパス（通信制）が各地にある。

※2 Memorandum of Understanding (MOU)。学術交流に係る了解覚書。

これにより現在、バルバドスからの学生が同研究科に2名在籍しており、それぞれプレゼンタム教授、黄教授が指導教官であることから、今後、ジャマイカのモナ校からも留学生を受け入れたいなどの話も出ました。杉村学長が指導している博士課程の学生がジャマイカ人ということで、ウイリアムズ局長も喜んでいました。

京都観光
週末は、京都観光で、金閣寺、龍安寺、清水寺、錦市場、西陣織会館、などを訪問し、古都京都で日本の伝統・文化を体験しました。中でも金閣寺が印象に残ったということです。

東北の震災―自然の偉大さと脅威を体感（仙台市・女川町）
・石巻市震災遺構大川小学校

(1) もともとこの地域は過去津波の被害がなく、市のハザードマップでも津波被災危険地域とはなっていないかった（同校は海に面しておらず、小高い山を挟んで海も見えない）ものの、その後学校近くの北上川に新北上大橋が架けられ、震災においてはこの橋に津波で流されたがれきがせき止められ、その結果高さ30メートルの津波が方向

を変え同校に押し寄せたそうです。14時46分の地震発生後、全校生徒は一旦校庭に集まったものの、直ぐに避難を行うことなく、15時36分に山ではなく近くの空き地に避難を開始しましたが、15時37分に津波が到達し、全校児童108名中、欠席や親族が連れ帰った者を除く学校管理下にあった児童78名のうち74名（うち4名は現在も行方不明）、教職員11名のうち10名が犠牲となったのでした。



石巻市震災遺構大川小学校

(2) 宮城県による大地震・津波発生想定と、市教育委員会による防災体制の見直し指示があったものの、上記の状況から同校の防災マニュアルは山へ逃げるというものになっていまして、遺族等は事実確認を求めると

もに、学校や教育委員会、県の責任を問う訴訟を起こし、2018年の高裁判決は十分なマニュアルが用意されていれば地震発生と同時に避難が可能で、犠牲も最小限であったとするものでした（最高裁もこれを支持し確定）。

・女川町の駅（シーパルピア女川）（昼食）

(1) 被災した女川市の中心部に、新市庁舎を中心に設けられたシーパルピア女川（飲食店、お土産物屋、理容・美容・ネイルショップ等が集まる）で昼食。

(2) 昼食後、女川港に面した震災遺構旧女川交番を視察。同交番は2階建ての鉄筋建築ですが津波により水没し、津波の力で横倒しとなるという極めて稀な例として震災遺構となっております。

・東松島市震災復興伝承館

(1) JR仙石線の旧野蒜（のびる）



駅舎を復旧・改築したものの、2階建ての同駅舎は、2階まで津波が押し寄せましたが、駅職員等は机等を重ねて屋上に避難して無事でした。

(2) 館内には、アクロバット飛行で有名なブルーインパルスが所属する自衛隊松島基地（視察中も、時折戦闘機の飛行音が聞こえていました）を含む同市の震災とその後復興の模様についての各種展示があり、ウイリアムズ局長は英語字幕付き映画（約45分）を食い入るように見入っていました。

**第6期ザビエル留学生
が上智大学を卒業**



APIC 重家理事長（左）とウバイさん（右）

2025年3月24日、第6期ザビエル留学生のウバイ・キンジョーさんが上智大学を卒業しました。ウバイさんは上智大学国際教養学部で4年間、勉学に励みました。

次期留学生が決定

この度、2025年度に受け入れ予定の留学生が次のとおり決定しました。

第3期 APIC-UWI 留学生



ショネル・グリフィス さん
Ms. Shonnelle Griffith

バルバドス出身

第10期ザビエル留学生



クレイトン・サム さん
Mr. Kreitton Sam

ミクロネシア連邦出身



リュウ・ナカソーネ さん
Mr. Ryu Nakasone

ミクロネシア連邦出身

「ザビエル高校留学生奨学金制度」へのご寄付のお願い

学生への支援をより一層充実させるため、本奨学金制度へのご寄付をお願いしております。いただいた寄付金は、留学生の受け入れにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等に活用させていただいております。

皆様のおかげで、留学生たちは上智大学で充実した生活を送っています。皆様の温かいご支援に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともご協力をお願い申し上げます。

● ザビエル高校 (Xavier High School) とは

1952年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立されました。4年制の男女共学で、生徒の数は約150名です。北太平洋地域で最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集います。生徒の学業水準はこの地域において最高水準であり、過去の卒業生には、モリ元大統領やクリスチャン元大統領をはじめ、この地域の政界・経済界のリーダーを輩出しています。

- 対象** ザビエル高校卒業生（毎年1～2名入学）
- 留学先** 上智大学国際教養学部 / 理工学部英語コース / Sophia Program for Sustainable Futures (SPSF)
- 奨学金** 卒業までの4年間の奨学金を授与
- 振込先** 三菱UFJ銀行 本店（店番 001）普通口座 1660339
口座名：一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金
カナ名：ザイ）コクサイ キョウリョク スイシン キョウカイ
※振込手数料はご負担をお願いしております。

APICの留学生たちが丹波篠山にて国内研修

太平洋・カリブ地域から来日し、上智大学および弊財団の奨学金を受給しつつ、学位取得を目指す留学生5名が、2025年3月12日から14日にかけて、兵庫県丹波篠山にて国内研修に参加しました。本研修は、日本の地方都市を訪問し、人的交流や文化体験を通じて日本に対する理解を深めることを目的に実施されました。弊財団からは、喜多萌子が同行しました。

1日目
午前中に東京を出発し、午後1時頃に丹波篠山へ到着。午後2時から郷土食調理体験を行いました。丹波篠山地域はイノシシ肉や黒豆で知られており、今回はそれらを使った「獅子汁」と「黒豆寿司」づくりに挑戦しました。

講師は、地域おこし協力隊として現地で食育やアレルギー対応のお菓子づくりに取り組む管理栄養士・河村知佳さんです。学生たちは、調理方法だけでなく、料理にまつわる歴史や地域の特色についても学ぶことができました。

たとえば、獅子汁は、明治時代に駐屯していた陸軍兵がイノシシを捕獲し、料亭で調理してもらったことに始まり、家庭では獅子汁、外食では「ぼたん鍋」として親しまれていたとのこと。また、黒豆寿司は粘土質で肥沃な土地を活かした丹波篠山ならではの料理で、お花見やお祝いの席でよく作られているとのことでした。酢を加えることで米がピンク色に色づくため、お稲荷さんの皮を上向きにしてその色合いを見せることもあるという文化的な工夫についても紹介されました。

日本食の調理に初めて挑戦する学生も多く、調理や食文化、歴史的背景について、楽しみながら深く学ぶことができました。調理後は河村さんとともに試食し、留学生の母国文化や留学生活について

の会話を交え、和やかな交流の時間を過ごしました。

2日目

午前中は、丹波篠山市草山地区にある野生鳥獣研究所「けものら」を訪問しました。同研究所は、地域おこし協力隊の金山俊作さんによって設立され、野生動物との共生を目指した取り組みを行っています。害獣駆除や解剖の機会の提供のほか、森林管理を通じて人と動物の適切な距離を保つ活動が紹介されました。

その後、森林の管理の取り組みの一環である小規模な自伐型林業のモデル林を見学し、作業道の作り方や環境への配慮について説明を受けました。自伐型林業とは、山への負荷を最小限にしながら少しずつ森林を整備する方法であり、学生たちは熱心に資金調達方法や実践技術について質問をしていました。

午後は今田地区へ移動し、「陶の郷」の見学と「省三窯」にて陶芸体験を行いました。陶の郷では約50の窯元の作品が展示されており、学生たちは作風の違いを見比



手びねり制作に挑戦

べたり、気に入った作品を購入したりしました。古丹波などの歴史的な丹波焼と現代作品の比較も興味深い学びとなりました。

3日目

省三窯では、陶芸家・市野元和さんの指導のもと、マグカップや湯呑の手びねり制作に挑戦しました。作品制作の技術だけでなく、「半農半陶」という、かつての農業と陶芸を両立した暮らしについての話もあり、地域の暮らしと文化についても理解を深めました。完成した作品は約3週間後に届き、学生たちは実物を手に取って大変喜んでいました。

最終日は、篠山城跡およびその周辺にある青山歴史村、丹波篠山デカンショ館、武家屋敷安間家資料館、歴史的建造物保存地区を見学しました。各施設では英語による篠山城の歴史や「デカンショ節」の紹介映像が上映され、学生たちは熱心に視聴していました。

3日間の研修を通じて、学生たちは日本の伝統文化や地域の暮らしに対する理解を深めることができました。また、地域の方々との交流を通じて相互理解も促進され、非常に有意義な機会となりました。

なお余談ではありますが、初日に1名の学生が新幹線内に携帯電話を忘れるという出来事がありました。無事に発見され、帰路で回収することができました。他国であれば戻ってこないことも多い携帯電話が見つかったことに、当該学生は日本人の他人への思いやりや、日本の治安の良さを身をもって体験し、深い感銘を受けていました。

本研修は日本文化の体験にとどまらず、日本社会への理解を深める貴重な学びの場となりました。



1&2.「獅子汁」と「黒豆寿司」づくりに挑戦中の学生たち 3. 巻き割り体験 4. 自伐型林業のモデル林を見学

APIC では太平洋・カリブ地域の留学生を支援するため、現在3つの奨学金制度を設けております。

APIC-UWI 留学生

カリブ地域の国々の環境問題に関して取り組み、国際社会に貢献できる人物を育成することを目的として、APIC-MCT 留学制度と同様に、上智大学大学院地球環境学研究科で修士号の取得を支援するプログラムです。西インド諸島大学 (The University of the West Indies : UWI) ・上智大学・APIC の三者間の協定が締結され、2023 年度より開始しました。

APIC-MCT 留学生

上智大学・ミクロネシア自然保護基金 (Micronesia Conservation Trust : MCT) ・APIC の三者間の合意に基づき、ミクロネシア 3 力国からの留学生を受け入れ、上智大学大学院地球環境学研究科での修士号取得を支援するプログラムです。2017 年のプログラム開始以降、これまでに 10 名が卒業しました。

ザビエル留学生

2014 年に始まった奨学金制度で、ミクロネシア連邦チューク州にあるザビエル高校・上智大学・APIC の三者間の合意に基づき、ザビエル高校から上智大学への留学生を支援するプログラムです。本奨学金制度により、これまでに 7 名が本奨学金制度によって上智大学を卒業しました。

パラオの海から、東京のキャンパスへ



INTERVIEW

ユリ・ホセイさん

Ms. Yuri Hosei

第8期ザビエル留学生 (2023年入学)

2023年9月に第8期ザビエル留学生として上智大学総合人間科学部に入学したユリ・ホセイさん。今回は、日本への留学の動機や、競泳選手として出場したパリオリンピック2024の思い出についてお話を聞きました。(APICにて和訳)

日本への留学について

——日本および上智大学で学ぶことを決断した理由は何ですか。

私が日本で勉強することに決めたのは、母が日本人であり、パラオで育った私にとって、自分のルーツの一部とつながりたいという思いが強かったからです。ずっと日本に住んでみることを夢見ていたのですが、正直に言って、まさか本当に東京に来ることになるとは思っていませんでした。

上智大学を選んだのは、特に英語学科を中心に、とても魅力的な英語プログラムがあったからです。英語で学びながら、日本の文化や日常生活に浸るという環境が、自分にとってとても合っていると感じました。

——今、どのような勉強・研究をしていますか。

「Sophia Programs for Sustainable Futures (SASF)」^{*}の教育学科で学んでいます。

——日本での学生生活はいかがですか。印象に残っている出来事などがあれば教えてください。

日本での学生生活は本当に楽しくて、とても充実した毎日を送っています。中でも、大学の水泳部に入ったことはとても大きな出来事でした。水泳だけでなく、チームワークや日本のチーム文化、社会的マナーについてもたくさんを学びました。厳しいトレーニングもありますが、仲間と過ごす時間もとても楽しく、私の日本での生活をより特別なものにしてきています。

水泳やオリンピック出場について

——パリオリンピック2024の競泳の「女子50メートル自由形」に出場されたそうですね。振り返ってみていかがでしたか？

パリに行ってからもうすぐ1年が



ユリさん(左)と、同じく第8期ザビエル留学生として入学したイザベラさん(右)

経つなんて、いまだに信じられませんが、今でも現実感がなく、夢のように感じています。オリンピックに出場できたことに心から感謝しています。自分にとって、とても力強く、かけがえない経験であり、今の自分を形作る大きなきっかけになりました。パラオを代表してあの舞台上に立てたことは、これからもずっと私の誇りです。

——水泳はいつから始めましたか？

水泳を始めたのは8歳(小学3年生)のときです。

——来日してからも練習をされていたかと思うのですが、勉強と両立できたと思います。

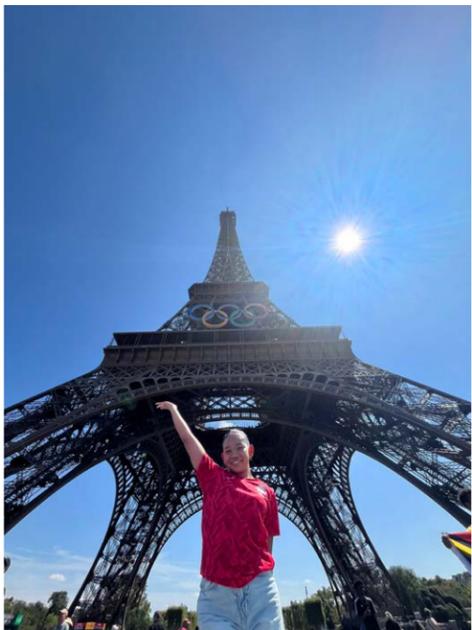
——来日してからも練習をされていたかと思うのですが、勉強と両立できたと思います。

せるための工夫や意識していることはありますか？

私にとって大切だったのは、自分の優先順位をしっかりと理解することでした。日本に来た目的は第一に「勉強」であることを常に自分に言い聞かせていて、ここで水泳を続けられるのは当然のことではなく、むしろ恵まれたことだと考えています。そのような意識が、物事を客観的に捉える助けになりました。とはいえ、高校時代からずっと学業と水泳を両立させてきたので、大きな負担と感じたことはあまりありません。もちろん大変に感じる時もありますが、年々うまく付き合えるようになってきたと思います。

今後の目標

——大学生活ももう間もなく折り返し地点に来るかと思いますが、これから



パリオリンピックでの思い出の写真。
上：決勝戦のときのプール/下：エッフェル塔の下で撮影

——今後の目標や夢について教えてください。

まず、イザベラと私がこの秋で3年生になるなんて、本当に信じられないです。時間が経つのはあっという間ですね！

将来の夢についてですが、私は昔から子どもと関わるのが好きでした。大きな夢のひとつは、いつかパラオで幼稚園を運営したり、子どもたちが安心して過ごせる場所をつくったりすることです。卒業後すぐに何をするかはまだはっきり決まっていますが、教育の分野でパラオに貢献し、ポジティブな影響を与えられるような仕事をしたいと思っています。

バルバドス 歴史の散歩道

その6 第4部 海賊たちの系譜(続き)

寄稿：元駐バルバドス日本国大使 品田 光彦

APIC ウェブサイトでは、品田光彦 元駐バルバドス日本国大使寄稿の連続コラム「バルバドス 歴史の散歩道」を配信しております。本誌では「バルバドス 歴史の散歩道(その6)」の内容を掲載しています(2021年執筆)。その他のコラムについては、APIC ウェブサイトをご覧ください。

海賊たちの栄光と没落

「海賊」という言葉には、「ならず者」
とか「犯罪者集団」を連想させる響き
があります。けれども、先に紹介した
ジョン・ホーキンスやフランシス・ド
レイクのように、16世紀にはイギリス
王室の後押しを受けた私掠船が他の
国、主としてスペインの船を襲って金
品を強奪するという、いったい公の船
団なのか強盗集団なのかよく分からな
いような連中がカリブ海を跋扈して
ました。

17世紀に入ってもしばらくはこう
いった傾向が続きます。ヘンリー・モー
ガン(1635~1688年)という
海賊もそのひとりでした。1650
年、15歳でウェールズから年季奉公人
としてバルバドスに渡ってきたモーガ
ンは、5年後に奉公の期限があけると
ジャマイカに流れて海賊に転職。メキ
メキと頭角をあらわした彼はジャマイ
カを根城とする海賊船の船長としてス
ペイン領のキューバやパナマを襲撃し
て大いに稼ぐようになります。稼ぎの
一部をジャマイカ植民地を通じてイギ
リス本国に上納していたことは言うま
でもありません。イギリスのライバル、

スペインの富を奪って名
だたる「公賊」になった
モーガンは、その「功績」
により国王チャールズ2
世からナイトの称号を与
えられました。そして、
しまいにはジャマイカ植
民地の副総督にまで出世
し、今度は海賊を取り締
まる側になりました(もっ
とも、彼はその裏で、賄
賂を払う私掠船にはス
ペ

イン船を襲う認可状を与えていたらし
いのですが)。
海賊上がりのモーガンが曲がりなり
にも海賊取り締まりをたねるようにな
ったことから分かるように、この
時期になると海賊行為は国のプロジェ
クトとしての性格を失い、ほぼ完全に
違法な略奪行為の様相を見せはじめま
す。バーソロミュー・ロバーツや黒ひ
げ、そして我々が紳士海賊ステイード・
ポネットなどがカリブを荒らしまわっ
ていたのはこの頃で、彼らは「海のア
ウトロー」として海賊の黄金時代を生
きていました。
ところがこの後、カリブに進出して
いたヨーロッパ列強の国家体制が徐々



ヘンリー・モーガン

に近代化し、海軍力も整備されてきて、
各国は植民地の港に正規軍を常駐させ
商船隊を保護する命令系統が整って
くるようになります。とくに1707年
にイングランドとスコットランドの合
同によって文字通り「グレートブリテ
ン王国」となっていたイギリスは、当
時のジャマイカの中心地、ポート・ロ
イヤルに強力な艦隊をおき海賊の取り
締まりを強化するようになりました。
また、綿花の輸出によって経済力をつ
け独り立ちの気運を高めつつあった北
米のイギリス植民地も、海賊に十分対
抗できるだけの海軍力を持つようにな
ります。
こうしてカリブの海賊業界はしだい

に斜陽産業となり、19世紀に入る頃
には、海賊たちは官憲に捉えられるか
引退するかを選択するしなくなっ
てしまったのでした。そして、1830
年代に帆船にかわって蒸気船が主流に
なったことも海賊に決定的な打撃をあ
たえます。髑髏マークを描いた旗を掲
げた帆船を繰ってカリブを荒らし回っ
た海賊たちは、こうしてしだいに消え
ていくこととなります。

ところが、海賊が衰退しつつあった
19世紀前半の一時期、バルバドスに奇
妙な海賊が現れました。

「城」に住む海賊 サム・ロード

1820年から20年ほどのあいだに
バルバドス南東部の沖合いで商船の座
礁事故が頻発しました。20隻以上が海
岸からそれほど遠くない岩礁に乗り上
げたという記録が残っています。そし



サム・ロード

て、それらの船の多くが、立ち往生し
ているうちに近づいてきた海賊船に襲
われ、積荷や金品を奪われたというの
です。

そのうちに聞き捨てならない噂が
人々の口にのぼり始めました。「夜間
航行していた船が陸地にたくさんの明
かりが灯っているのを見て、そこが首
邑ブリッジタウンの港だと思って近づ
いたら岩礁に乗り上げた。ブリッジタ
ウンの明かりだと思っただけは実際には
ビーチに面して建つ大きな館のまわり
に群生しているココナツの樹に吊り下
げられたランタンの灯火だった」とい
う噂です。そしてその館、「サム・ロー
ド城」の主人こそが座礁した船を襲う
海賊の首領に違いない、という風評が
立ったのです。

ロング・ベイという美しい湾に面し
てそびえるこの館の主はサミュエル・
ホール・ロード、通称サム・ロード
(1778~1844年)という人物
でした。彼は、バルバドス、セント・フィ
リップ教区の生まれ。父親は砂糖キビ・
プランテーションの所有者で、サム・
ロードはなんの不自由もない豊かな環
境に育ちました。ところが彼は若い頃
から素行が悪いことで有名でした。ひ

どく見栄っ張り、平気で人をだます
上にかんがりの乱暴者だったというこ
とです。

裕福なロードは、たびたび宗主国イ
ギリスに旅行していたのですが、20
代後半にイギリスでルーシー・ワイト
ウィックという美しい娘と出会いま
す。ルーシーも富裕な名家の出身でし
た。彼女は、それまで見知っていた堅
苦しいイギリス男たちとは一風変わっ
た、カリブ出身のプレイボーイ、サム・
ロードの甘言に乗せられて、彼からの
結婚の申し出を受け入れました。言い
伝えによれば、社交界に出入りしてい
たロードはカネと名誉目当てにはじめ
からそれに見合う女性を物色していた
ということになっています。ルーシー
の父親はロードの本性にうすうす感づ
いていたのか、娘とロードの結婚に猛
反対したそうです。でも、ロードにぞっ
こんだったルーシーは父の反対を振り
切って、1808年、彼とともにバル
バドスに向かいました。

ところが、結婚生活はルーシーが思
い描いていたとはまるで違ったも
のになってしまします。ロードはどん
でもないDV夫だったので。年を経
るごとに彼は本性を見せはじめ、ルー

シーはひどい扱いを受けるようにな
り、しまいには居館の地下室に軟禁状
態にされて、まるで囚人のような暮ら
しを強いられていたというのです。こ
の間、ロードは外で贅沢ざんまいの放
蕩に明け暮れたばかりか、使用人だっ
た黒人奴隷の女性を愛人にして、ふた
りの息子をもうけています(註1)。ルー
シーは結婚7年目の年に、地下室の見
張り番をしていた男に金品を渡して脱
出の手引きをさせ、イギリスに逃げ
戻ったということです。

「城」建設とロードの末路

ロードが、父親から受け継いだロン
グ・ベイの敷地に豪邸を建設すること
に執念をみせはじめたのはこの頃から
でした。

「サム・ロード城(サム・ロード・
キャッスル)」とみずから名付けた豪
邸の建設は彼のライフワークとなるの
ですが、当然これには多額の資金が必
要です。父親から相続したカネをつぎ
込んでとても足りない。ロードは次
から次へと借金を重ねます。「城」を
建設中の1817年には早くもトラブ
ルを起こし詐欺で訴えられました。が、

この時は証拠不十分で処罰を免れています。

サム・ロード城は1820年に完成。当時イギリスで流行していたジョージアン様式で、珊瑚由来の白い石灰岩をふんだんに使い広大な庭園に囲まれたこの建物は、豊かなプランテーション領主が多かった当時のバルバドスでも屈指の贅沢な個人用邸宅でした。

ロードはここで王侯気分を暮らしを始めます。けれども内情は返済する見通しの立たない借金まみれ。大勢の債権者とのトラブルや訴訟が頻発するようになります。しかし、悪知恵にたけたロードはここで一計を案じます。ビーチに面して建つ城から沖をながめると岩礁が多い海域でときどき座礁する船があるのではないかと、これを放っておく手はない、というわけです。

彼は、先に触れたようなやり方―城のまわりに群生するココナツの樹にカンテラをぶら下げ、船に航路を見誤らせて座礁させる―という方法を使って、餌食となった船から金目のものを略奪することを思いついたのです。贅沢暮らしを続けながら借金を返すために、この奇抜な海賊行為を繰り返すという自転車操業がはじまりました。サ

と彼らは作業をやめて立ち去った。マスクをつけていたのは数人のみだ。工事を請け負っている中国系建設会社の通訳に本紙記者が事情を聞いたところ、作業などしていない。機材を雨から守るために覆いをかけていただけだ。ここにいるのは現場に住んでいる中国人作業員だけで部外者の立ち入りは禁止されている。という答えが返ってきた。サム・ロード城は2015年

ム・ロード城の中を飾っていたヨーロッパ製の高価な家具や絵画の一部は、彼がこうして奪い取ったものも混じっていたと考えられています。

けれども海賊行為をするには手下が必要で、やはりどこからか情報が漏れる。もともと評判が悪かったロードが卑劣な海賊行為に手を染めるようになったのではないかと説がしたいに島内に知れわたるようになります。さしものロードもどうとうバルバドスにいらなくなると、心血を注いで築いた城をあとして、ひそかにイギリスに逃亡してしまいます。無一文となった彼はその後二度と島に戻ることはなく、1844年、イギリスで孤独と貧窮のなかで世を去ったそうです。^(註2)

ロードが虚飾の人生を送った豪邸には後日譚があります。彼の死後、親族の手にわたったサム・ロード城は、100年近くのあいだ親族の子孫に代々所有されていたのですが、1942年、人手にわたりホテルに改修されました。「サム・ロード城

にアメリカの大手観光開発企業、ウィングダム・グラント・リゾート社に買収されることとなり、450室の五つ星ホテルの建設のために中国輸出入銀行が2億4千万ドルを融資した。新ホテルの建設工事は2017年に始まり、2020年には竣工予定だったものの、建築工法、文化、倫理観や支払いをめぐる関係者間の意見の違いにより工事が遅れている

ホテル」と名付けられたこのホテルは何度かオーナーを変えながらも、一時はバルバドス島内でも有数の高級ホテルとして知られた時期もあったのですが、2000年代に入ると放漫経営がたたって倒産してしまいます。

2010年、荒れるにまかされていたサム・ロード城で原因不明の火災が発生。建物は分厚い石灰岩の外壁だけをのこして焼け落ちてしまっています。このあとサム・ロード城はバルバドス政府の管理下に置かれることとなりました。

さて、この島でも新型コロナウイルスが蔓延していた最中の2021年2月、地元の日刊紙にこんな記事が掲載されました。

〈セント・フィリップ教区のサム・ロード再開発プロジェクト現場周辺の住民たちから懸念の声があがっている。新型コロナウイルスによる政府の厳しい外出制限にもかかわらず、プロジェクト現場では多くの作業員が仕事を続けているのである。本紙チームが現場をたずねてみると、30人ほどの中国人作業員が重機を使って仕事をしていて、我々が写真を撮っていることに気づく

(2021年2月20日付「サタデー・サン」紙記事から抜粋)

奇想天外な海賊行為をしていた放蕩児サム・ロードが19世紀に築いた豪邸の数奇な運命は今も続いているようです。そのうちさぞかし立派なホテルができるのでしょうか、泊まってみたいという気になれないのは筆者だけでしょうか。^(註3)

(第5部「砂糖、ラム酒、そして奴隷」に続く)

(本稿は筆者の個人的な見解をまとめたものであり、筆者が属する組織の見解を示すものではありません。)



廃墟になったサム・ロード城。右手に見えるのは建設中の新ホテル。—2022年4月撮影。



英語と中国語の看板がある新サム・ロード城ホテル建設現場の入口。—2022年4月撮影。



サム・ロード城の敷地から見たロング・ベイの風景。この沖合いで座礁事故が頻発しました。

● 註1 この息子たちについては記録が残っています。彼らは成人するとセント・ルシア島に移り、さらにその後カナダに移住。その子孫は現在もカナダに住んでいることが確認されています。

● 註2 後世の検証によれば、ロング・ベイ沖の座礁事故のすべてがロードのしわざというわけではなかったようです。というのは、いくつかの事故は、ロードがイギリスに遊びに行っていてバルバドスを留守にしていた時期に起きたからです。しかしやはり、かなり多くの座礁と略奪がロードと部下たちの犯行であったことは間違いなく考えられています。なお、1875年にサム・ロード城があるセント・フィリップ教区の海岸に灯台が設置されて以降、座礁事故はバツパリと途絶えたということです。

● 註3 ロードの妻、ルーシーが幽閉されていた館の地下には館と海岸を結ぶ地下道があって、そのどこかにロードが隠した財宝が残っているという言い伝えがありました。この建物が火災で廃墟になったあと財宝を捜した人たちもいるようですが何も見つからなかったそうです。また、座礁事故が頻発した沖合では、座礁船に積まれていた金貨を捜す酔狂なダイバーたちが現在もいるのですが、何かが見つかったという話は聞いたことがありません。



令和7年度 (2025年度)

(令和7年7月1日～
令和8年6月30日まで)

事業計画書

【簡略版】

※本誌では簡略版を掲載して
います。詳細につきましては APIC
ホームページをご覧ください。

1. 太平洋島嶼国開発協力事業

太平洋島嶼国との信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、「太平洋島嶼国開発協力基金」を活用して、太平洋島嶼国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、在外日本大使館及び外務省アジア大洋州局大洋州課の協力を得ながら、次のプロジェクトを実施する。

(1) 太平洋諸国・大学生招待計画【継続】

太平洋島嶼国の短大・大学生を我が国に招待し、短期間の研修を行う。新型コロナウイルス感染症蔓延による渡航制限等に鑑み令和2～4年度は実施が困難となり中止としたが、令和5年度以降は過去に冬季(1月)に実施していたものを夏季(7月)に変更して実施することとした。本年度は、南太平洋大学(トンガ、フィジー)から2名、ミクロネシア連邦、パラオ、マーシャル諸島の短期大学から各1名、計5名が上智大学の夏季プログラムに参加し、日本等についての基礎講義を受講するとともに、環境・エネルギーなどの関連施設の視察も行う。実施時期は2025年7月を予定。日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学・大学生招待計画と同時期に実施する。

(2) 太平洋諸国・記者招待計画 (APIC Journalism Fellowship Program)【継続】

太平洋島嶼国の有力な若手有望記者を招待して我が国の一般社会事情や環境保護・防災・再生可能エネルギー利用・気候変動対策などについて理解を深め、もって我が国の現状についての広報を行う。本年度は、記者3名(トンガ、フィジー(出身)、パラオ)を招待して、大阪、淡路島、高松、直島を訪問、このタイミングで開催されている大阪・関西万博、大阪の中小企業(廃材利用の家具)、淡路島の震災記念館、園芸高校、高松の海岸漂着ごみ回収、直島(環境問題・観光地)等の視察を予定している。本件招待計画については、諸外国の記者招待に知見のある公益財団法人フォーリン・プレスセンターの協力を得て実施する。実施時期は2025年9～10月を予定。カリブ記者招待計画と同時に実施する。

(3) 太平洋諸国・リーダー招待計画【継続】

太平洋島嶼国のリーダーを我が国に招待して、我が国のオビニオン・リーダーとの意見交換や、環境・エネルギー・観光等に関する視察を通じて、我が国についての理解を深める。昨年度は、国交樹立30周年でもあるパラオ共和国から伝統的女性リーダーなど女性3名を招待した。本年度は、パラオ、フィジー等から大臣レベルの要人を招待予定。

(4) 太平洋諸国・環境セミナー【継続】

我が国からオビニオン・リーダーを太平洋島嶼国に派遣して、我が国が取り組んでいる環境問題等についての講演を行うと共に、その機会を利用して対日理解を深める。昨年度バヌアツにおいて、太平洋諸島センター(PIC)と合同で実施することで準備していたが、現地の地震により延期となり、本年度に実施することとなったもの。1日目がPIC主催のビジネス・セミナー、2日目がAPIC主

毎月1回(8月以外)開催される APIC 早朝国際情勢講演会では、外務省幹部、

在在外大使などを講師としてお迎えし、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。現職の外務事務次官や外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。

新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、2021年5月からはオンラインでの配信も開始しました。現在は会場・オンライン同時配信で開催しております。

本講演は、APIC維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細につきましては、本誌裏表紙に記載している APIC 事務局の連絡先にご照会ください。

講師・演題一覧 (2025年1月～6月実施分)

【第413回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年1月16日(木)
講師：外務省総合外交政策局長 河邊 賢裕氏
演題：「今後の日本外交の展望と課題」

【第416回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年4月17日(木)
講師：前駐英特命全権大使 林 肇氏
演題：「今日の英国から何を学ぶか」

【第414回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年2月20日(木)
講師：前駐ミャンマー特命全権大使 丸山 市郎氏
演題：「最近のミャンマー情勢と日本の外交 -ミャンマー駐在を顧みて-」

【第417回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年5月15日(木)
講師：前駐エジプト特命全権大使 岡 浩氏
演題：「中東と日本 -アラビストが顧みる中東とその行方-」

【第415回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年3月13日(木)
講師：前駐ウクライナ特命全権大使 松田 邦紀氏
演題：「ウクライナ情勢と日本の外交 -同国駐節を顧みて-」

【第418回早朝国際情勢講演会】
日時：令和7年6月19日(木)
講師：外務省中南米局審議官 高橋 美佐子氏
演題：「我が国の対中南米外交」

催の環境セミナー。講師は上智大学大学院地球環境学研究所の織末實教授。常務理事が同行し、APICの活動についての広報、ひいては環境・エネルギー・観光についての日・バヌアツ協力を促進する。両国環境関係者のネットワーク構築やPIC経済ミッションに参加する日本企業による将来のビジネス展開に貢献するものと考えられる。実施時期は2025年9月の予定。また、前年度に環境セミナーが実施できなかったことを踏まえて、年度内(2026年3月頃)に、フィジーなどにおいても開催を検討中。

(5) APIC・MCT協力事業(小規模グラント)【継続】

パラオ・ミクロネシア連邦・マーシャル諸島・グアム・北マリアナ諸島の3カ国米領2地域(旧太平洋諸島信託統治領(旧南洋群島)十カ国)は、生物多様性を保全し持続可能な自然資源の利用を図るため、「ミクロネシア・チャレンジ」という共通の環境政策を策定し、環境保護のための資金を積み立てているが、この資金の管理を委託されているのが Micronesia Conservation Trust (以下 MCT) というミクロネシア連邦ポニーに本部を置く民間の環境保護基金である。MCTは、また、自身の活動として、世界銀行等からの資金を得て環境保護活動も実施しており、APICとの協力事業もその一環である。

APICは、2014年10月にMCTとの間で協力に関する覚書(MOU)を締結しており、これまですべてミクロネシア連邦において、豚舎の排泄物処理、貯水タンク、貯水池、給排水設備改修プロジェクト、給水パイプの取り換えプロジェクトなど、環境分野の支援を行ってきた。今年度も要請があれば、支援を行うこととし、MCTだけでなく、他の機関との連携による支援も視野に入れつつ、現地での実態を踏まえた具体的な

要請を受け、検討することとする。

(6) APIC・MCT協力事業(大学院生支援)【継続】

MCTとの協力事業の中で長期的に環境保護に携わる人材育成も意義のある支援であるという観点から、上智大学との協議の末、2017年に、APIC・MCT留学制度を創設し上智大学大学院地球環境学研究所で受け入れを行うこととなった。協定により、ミクロネシア地域3か国(パラオ・ミクロネシア連邦・マーシャル諸島)の国籍・市民権を有し、環境保護に関心のある者が最大2名、地球環境学研究所のあんまくとどなる。教授の指導の下で2年間の修士号を取得するプログラムとなっている。この制度により、MCTからの推薦があった者に対して高度な大学院教育の機会を与えることが可能となる。

継続的にミクロネシア地域の未来を担う人材を育成するためにミクロネシア3カ国からの学生10名が既に卒業し、母国でも活躍している。現在、2名の学生が在学している。今年度秋は、該当者がいない。

(7) 上智大学 アイランド・サステナビリティ研究所 (Island Sustainability Institute) の支援【継続】

2022年7月、上智大学は、島嶼部や島嶼国が良質な発展を遂げられるスキームの創成を目指し国内外を対象としたシンクタンク機能を有するアイランド・サステナビリティ研究所(所長・あんまくとどなる)を設立した。APICは上智大学と連携協定を締結しており、これまでシンボジウムの共催や、シンボジウム、セミナー等の被招待者や歓迎会の費用負担等の協力支援を行ってきた。今年度も要請があれば、支援を行うこととし、時宜をとらえた支援を今後も行っていくことしたい。なお、同研究所は、23年9月頃から、JAL、

住友林業・イオン環境財団とパートナーシップを締結して活動を開始しているが、企画していた国際機関、政府関係機関、国内外企業、法人、国外の著名連携大学と幅広く、パートナーシップを締結する段階には至っていないとのこと。

⑧ バヌアツLEDランタンのシェアリングサービス事業・小規模グラント【新規】

本件は、再生可能エネルギーを活用するLEDランタンのシェアリングサービスにかかる小規模グラントを実施しようとするもの。

この案件提案の背景としては、電力系統が整備されていない、未電化地域に居住する人々は電気製品の利用が困難なことから、東芝エネルギーシステム株式会社（2026年4月1日に（株）東芝に統合予定）が、2019年から太平洋の島嶼国を対象に再生可能エネルギーで充電する電気製品のシェアリングサービスのニーズ調査や実証を進め、2023年8月に、バヌアツ・マランバ州において、シェアリングサービスの試行（1か月間）にかかる覚書を地域の代表者と間で締結し、同州の一村を対象に、太陽光エネルギーで充電したLEDランタンを住民へ貸し出す事業を実施していること（同国政府が掲げる再生可能エネルギー政策の達成に向けた取り組みとして期待されている）であり、APICの支援する環境・エネルギー分野での支援に合致すると思われる。

なお、これにて、Micronesia Conservation Trust

（以下MCT）の提案に基づき、ミクロネシアにおいて小規模グラント事業として貯水タンクや水道管取り換え事業などを実施してきている（前述（5））が、昨年度は提案がなかったことから、本年度は新規事業としてバヌアツでのLEDランプ事業を提案するもので、大使館・東芝と協議しつつ実施することとする。

し国内外を対象としたシンクタンク機能を有するアイランド・サステナビリティ研究所（所長・あん・まくどなるど教授）を設立した。APICは上智大学と連携協定を締結しており、これまでシンポジウムの共催や、シンポジウム、セミナー等の被招待者や歓迎会の費用負担等の協力支援を行っており、上記（6）との相乗効果を図る観点から、時宜をとらえた支援を今後も行っていくこととした。なお、同研究所は、2023年9月頃から、JAL、住友林業、イオン環境財団とパートナーシップを締結して活動を開始しているが、企画していた国際機関、政府関係機関、国内外企業、法人、国外の著名連携大学と幅広く、パートナーシップを締結する段階には至っていないとのこと。

⑧ 次年度以降の案件調査費・予備費

次年度以降の事業の発掘や検討のための調査費用および予備費

3. 国際協力に関する講演事業

① APIC 早朝国際情勢講演会【継続】

本件早朝講演会は、会員を対象に、外務省幹部、在外大使等による時局の日本の外交課題や激動する国際情勢などについて質の高い内容の話題を提供する講演会として、参加者から評価が高い。本件講演会はAPICが諸活動を展開する上で欠かせない事業であり、今後とも会員の期待に沿えるように毎月1回（8月を除く）企画して行く。コロナ禍の下、2021年5月に初めてオンライン配信を導入、以降会場とオンライン配信の同時開催をしており、参加者からの需要も高く、評判も良いため今後も暫く継続して同時開催する。

② 国際協力懇話会【継続】

（1）と同様に、テーマは外交課題・国際情勢等であるが、参加者を20名前後とした小規模の懇話会

⑨ 次年度以降の案件調査費・予備費

次年度以降の事業の発掘や検討のための調査費用（予備費）および予備費

2. 日・カリブ友好協力事業

カリブ諸国の信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、「日・カリブ友好協力基金」を活用して、カリブ諸国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、在外日本大使館及び外務省中南米局カリブ室の協力を得ながら、次のプロジェクトを実施する。

① 西インド諸島大学・大学生招待計画【継続】

新型コロナウイルス感染症蔓延による渡航制限等に鑑み令和2～4年度は実施が困難となり中止としたが、令和5年度以降は過去に冬季（1月）実施していたものを夏季（7月）に変更して実施することとした。本年度は、西インド諸島大学の各キャンパス（ジャマイカのモナ校、トリニダード・トバゴのセント・オーガスティン校、バルバドスのケープヒル校、アンティグア・バーブーダのファイブ・アイランズ校、グロバルキャンパス）の大学生計5名を我が国に招待して、上智大学において日本等についての基礎講義を受講させるとともに、環境、エネルギーなどの関連施設の視察の機会を与える。実施時期は2025年7月を予定。太平洋諸島大学生招待計画と同時に実施する（前述（1.（1）））。

② カリブ諸国・記者招待計画【継続】

カリブ島嶼国の有力／若手有望記者を招待して我が国の環境保護、防災・再生可能エネルギー利用・気候変動対策などについて理解を深め、もって我が国の現状についての広報を行ってもらう。本年度は、ジャマイカ、ベリーズ、トリニダード・トバゴから各1名を招待して、大阪、淡路島、高松、直島を訪問。このタイミングで開催されている大阪・

を年3回程度実施する。

4. 留学生奨学金事業【継続】

ザビエル高校（ミクロネシア連邦チューク州）には、ミクロネシア連邦が中心ではあるが、パラオ及びマーシャル諸島からも最優秀の生徒が入学する。卒業生としてミクロネシア連邦モリ元大統領やマーシャル諸島デビッド・カアア前大統領等それぞれの国のリーダーを輩出している。APICが上智大学と協力して開始したこの「留学生制度」については、3カ国の首脳の間で極めて高い評価が得られている。

上智大学・ザビエル高校・APIC間で締結した留学生協定に基づき、2014年9月から下記の表のとおり、ミクロネシア連邦出身者を中心にザビエル高校の卒業生が上智大学（学部生）に入学している。2018年から2025年6月までの間に7名が卒業（学士号取得）した。2021年、2022年は新型コロナウイルスに関わる渡航制限などを考慮し、受け入れ中止となったが、2023年より再開。現在4名が在学中であり、今年度9月には2名の新入生の入学が予定されている。

ザビエル留学生は、日本での留学中に上智大学で勉強に励むと同時に、過去には広島での上智大学ソフィア会の年次大会や佐原の大祭（千葉県香取市佐原）に参加、島根県隠岐郡海士町の訪問等で、日本の歴史・文化・社会についての知見を深めるなど課外活動も経験している。

引き続き、募金活動に努力するとともに、留学生に対する生活費等の支給を含め留学が充実するよう支援を行っていく。（なお、APICは旅費、生活費を負担し上智大学は学費、寮費を負担。）

関西万博、大阪の中小企業（廃材利用の家具）、淡路島の震災記念館、園芸高校、高松の海岸漂着ごみ回収、直島環境問題（観光地）等の視察を予定している。

公益財団法人フォーリン・プレスセンターの協力を得て太平洋記者招待計画と同時に実施するものである。実施時期は2025年9～10月を予定（前述（1.（2）））。

③ カリブ諸国・リーダー招待計画【継続】

2024年は、日・カリコム関係30年、日・ジャマイカおよび日・トリニダード・トバゴ国交樹立60年を記念して日・カリブ文化交流年と定め、文化分野の政府関係者・学識関係者の訪日を実現したいという外務省の要請を受けて、5か国（バルバドス、トリニダード・トバゴ、ジャマイカ、ハイチ、ベリーズ）から各2名ずつ招待した（最終的にハイチからは1名参加）。本年度は、在トリニダード・トバゴ大使館からリーダー招待について要請があり、検討中。

④ 西インド諸島大学学長招待計画【継続】

過去に西インド諸島大学（UWI）の学長（Chancellor）・実質的なトップ）及び各分校（ジャマイカ、トリニダード・トバゴ共和国、バルバドス）学長3名を同時に招待する予定であったが、日程の調整が難しかったため、順次実施することとし、平成28年度にケープヒル校（バルバドス）学長、平成29年度にセント・オーガスティン校（トリニダード・トバゴ）学長、令和4年度に再びケープヒル校（バルバドス）学長を招待した。本計画においては、我が国大学との意見交換のほか、環境、エネルギー、観光及び書く学長の専門分野に関連する視察を通じて、我が国についての理解を深めてもらうこととしている。今年度は、モナ校（ジャマイカ）の学長の訪日を実現すべく、在ジャマイカ日本大使館と調整に当たってきたところ、11月に実施することで詳細を

詰めている段階にある。

⑤ 西インド諸島大学・大学院生支援【継続】

カリブ地域の環境問題に携わる人材の育成を行うことは意義があるという観点から、以前より上智大学、APICと関係のあった西インド諸島大学（UWI）と協力し、前述のAPIC・MCT留学と同様の大学院制度を創設する案が生まれた。2022年には在バルバドス日本大使館の協力も受け、UWI、上智大学、APICの三者間の協定を締結。これにより、UWIのケープヒル校（バルバドス）からの推薦があった1名を毎年上智大学地球環境学研究所で受け入れることが可能となった。この制度の目的は、大学院での学びを通して、カリブ地域の国々の環境問題に関して取り組み、国際社会に貢献できる人物を育成することである。

2023年秋にUWIケープヒル校の卒業生が1期生として同研究所に入学し、本年9月に卒業予定。9月には、新たに3期生1名が入学予定で在学学生1名と合わせて、在校生は2名となる見込み。

⑥ カリブ諸国・環境セミナー【継続】

過去、太平洋と同様に、カリブ地域でも環境セミナーを開催することとして、平成28年度、ジャマイカ、平成29年度、バルバドス、平成30年度、トリニダード・トバゴで、それぞれUWIのキャンパスにおいて、セミナーを実施した。講師は、上智大学大学院地球環境学研究所まくとなるど教授。それ以降は、カリブ諸国において実施していないので、UWIとの協力関係の進展にも鑑み、本年度は、大使館とも協議して実施を検討したい。

⑦ 上智大学 アイランド・サステナビリティ研究所 (Island Sustainability Institute) の支援【継続】

2022年7月、上智大学は、島嶼部や島嶼国が良質な発展を遂げられるスキームの創成を目指

2025年7月1日現在
(氏名五十音順・敬称略)

APIC 役員名簿

◆ 役員

| | | |
|------|--------|--|
| 理事長 | 重家 俊範 | (最終官職：外務省 駐大韓民国特命全権大使) |
| 常務理事 | 田中 一成* | (最終官職：外務省 駐マーシャル諸島共和国特命全権大使) |
| 理事 | 荒木 恵 | 一般財団法人国際協力推進協会 (APIC) 事務局長 (最終官職：財務省 国際局付派遣職員 (アジア開発銀行職員)) |
| 理事 | 今野 秀洋 | 一般財団法人貿易・産業協力振興財団 理事長 (最終官職：経済産業審議官) |
| 理事 | 側嶋 秀展 | (最終官職：外務省 駐ミクロネシア連邦特命全権大使) |
| 理事 | 鳥飼 玖美子 | 立教大学 名誉教授 |
| 理事 | 村上 洋 | 元 東レ株式会社 取締役／元 味の素株式会社 監査役 |
| 理事 | 山本 達也 | エーオンジャパン株式会社 代表取締役社長 |
| 理事 | 金成 憲道 | 元 ドイツ証券株式会社 取締役会長 |
| 監事 | 吉川 英一 | 元 株式会社三菱UFJ銀行 副頭取 |

◆ 評議員

| | | |
|-----|-------|--------------------------------------|
| 評議員 | 石堂 一成 | 東京コンサルティング株式会社 代表取締役社長 |
| 評議員 | 坂本 吉弘 | 一般財団法人安全保障貿易情報センター 顧問 (最終官職：通商産業審議官) |
| 評議員 | 炭谷 茂 | 社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長 (最終官職：環境省 事務次官) |
| 評議員 | 島内 憲 | 元 駐ブラジル連邦共和国特命全権大使 |
| 評議員 | 高原 明生 | 東京女子大学 特別客員教授 |
| 評議員 | 廣野 良吉 | 成蹊大学 名誉教授 |
| 評議員 | 本多 義人 | 東神インターナショナル株式会社 名誉会長 |
| 評議員 | 蓑田 秀策 | 一般財団法人100万人のクラシックライブ 代表理事 |

※ 2025年3月31日付で新たに就任

APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省幹部・大使等による **APIC 早朝国際情勢講演会** を自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。

詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場所 The Okura Tokyo 会議場

お問い合わせ TEL: 03-5577-2900

時間 午前 8:30 ~ 10:00（朝食付き）

EMAIL: apicinfo@apic.or.jp

令和 7 年 7 月 1 日 発行

■ 発行人 重家 俊範

■ 発行所 一般財団法人 国際協力推進協会 (APIC)
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町 6-12 紀尾井町福田家ビル 3 階
TEL: 03-5577-2900 FAX: 03-5577-2901
URL: <http://www.apic.or.jp/>

■ 編集 APIC 事務局